

なむあみだぶに「こころ」とられて

妙好人浅原才市の詩^{うた}

岡村康夫

〈論文要旨〉 拙論は、妙好人浅原才市の詩を「なむあみだぶに「こころ」とられて」という言葉を中心に再構成することを試みる。「なむあみだぶつ」は浄土教的信の根源語であり、才市の詩の多くもこの言葉で締め括られる。ただし、彼の詩の妙味はその「なむあみだぶつ」の只中において性起する逆転の切れ味にある。彼の詩のなかでは、まず念仏は「称える」ものから「聞く」ものへと転換され、さらにそれは「こころにあたる」ものとして出会われる。そして最終的にはその念仏との根源的出会いは「こころとられて」という言葉に凝縮され、彼の詩の中核を形成するものとなる。

また、才市の詩の多くは「慚愧と歎喜」あるいは「あさましやありがたや」と言われる対極的宗教感情の緊迫関係のなかで歌われる。それは徹底した自己否定であると同時に自己肯定であるような宗教的感情の直接的吐露である。ただし、「あさましや」は単なる自虐的自己卑下の言葉ではない。才市の詩のなかでは単なる自己内反省的自己は徹底して追い詰められ、その自己追窮の果てに逆転的に新たな世界が開かれる。また「ありがたい」も単なる自己満足・喜悦の感情ではない。それは「うれしかろうがかるまいが」現前到来するものである。この両者はその緊迫関係の極に「こころとられて」、すなわちまさに脱底的に「うむしろい」と言われる根源的生の境位を開く。

また、この「うむしろい」と呼ばれる生の境位は、才市と弥陀とが「ひとつ」となるところであり、すなわち「機法一体」と呼ばれる境位である。それはまさに「言うこと絶えた」ところであるが、そこから実に一万首にも及ぶと言われる詩が歌われる。それはそこがすべてが変貌するところであるからである。浮き世が稼業がさらには世界そのものが変貌する。「まよいの浮き世がうむしろい」と言われ、さらには世界も虚空も空気も「うれし」と歌われる。またさらにそこでは、すべてが超脱され、才市は才市自身へ還り、世界は世界本来の輝きを取り戻す。才市の詩はそういう根源的生への展望を開いている。

目次

はじめに、今日も来る日も やーい やーい

一、なむあみだぶにころとられて

一の一、弥陀の呼び声なむあみだぶつ

一の二、ころにあたるなむあみだぶつ

一の三、ころとられて

一の四、まるでとられて

二、ざんぎとかんぎ

二の一、あさましや

二の二、あさましやありがたや

二の三、親のころが知られたら

二の四、うむしろい

三、世界・虚空もみなひとつ

三の一、機法一体

三の二、まよいの浮世がうむしろい

三の三、臨終済んで葬式済んで

三の四、浮世はたらきうむしろい

おわりに、世界・虚空・空気もみなうれし

はじめに、今日も来る日も やーい やーい

四

拙論は、浅原才市⁽¹⁾という浄土真宗の一篤信者によつて書き残された「口あい」と呼ばれる一種の宗教詩を手がかりに、彼の開き得た宗教的生の意義を明らかにするものである。才市は類い稀な宗教詩人である。その宗教詩の世界は、古今東西の宗教思想家の開き得たそれに勝るとも劣らない。そこには浄土教的生に徹することによつて開かれた普遍的宗教的生の世界がある。すなわち、才市の残した詩は、勿論その浄土教的色彩を色濃く反映するものではあるが、その詩の歌われるところには単なる浄土教的生に閉塞されない根源的宗教的生の世界が開かれている。

ところで、才市の詩は如来と才市とが直接するところから溢れ出る。つまり、それは才市が「弥陀の直説」〔才市集、ノート三の三〕⁽²⁾に出会うところから歌われる。勿論それは才市のみ限定される経験ではなく、その他の妙好人⁽⁴⁾と呼ばれる人々にも共通する根本経験である。ただし、それぞれの妙好人を妙好人たらしめるものは、その直接するところから一步出るところにある。「阿弥陀経」に「池中蓮華、大如車輪、青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光、微妙香潔」⁽⁵⁾とある。無色透

明の光がそれぞれの蓮華に出会うことよつて、青黄赤白の光に変貌する。それと同じように、如来との直接によつてそれぞれの個性が生かされ、それぞれの個性がそれぞれの個性として働き出るところに「微妙香潔」あるいは「妙好」と言われる所以のものがある。赤尾の道宗の禁欲・果敢の世界、因幡の源左の忍苦・慈愛の世界、讃岐の庄松の奔放・洒脱の世界等、いずれも同じ「弥陀の直説」に出会うことよつて開かれた個性溢れる世界である。才市の場合、まさにその詩を歌うということにおいて才市が才市に還るということが性起するのであるが、それは彼が到り得た宗教的生の自然の流露である。才市の詩として寺本慧達氏によつて次のようなものが紹介されている。

才市よい うれしいか ありがたいか
ありがたいときや ありがたい
なつともないときや なつともない
才市、なつともないときや どがあすりや
どがあも しょうがないよ
なむあみだぶと
どんぐり へんぐり しているよ
今日も来る日も やーい やーい

(寺本慧達 「浅原才市翁を語る」89頁)⁽⁹⁾

この詩には、「うれしい」とか、「ありがたい」とかいう浄土教的生に付き纏うこだわりから解放された才市の境涯が見事に言い表わされている。一方では確かに「ありがたいときや ありがたい」と言い得るものが才市にはある。しかし、他方では同時に「なつともないときや なつともない」と言い切るところこそ、才市の到り得た宗教的生がある。才市の言うように「ただなしのただのただ」(才市集、ノート一四の179)のところへ、すなわちあらゆるこだわりから解放されて「なつともない」ところになり還るところにこそ真の宗教的生がある。それはこの詩では、「なむあみだぶと どんぐり へんぐり しているよ」ということを通して、最終的には「今日も来る日も やーい やーい」というところに出ることに言い表わされている。才市の詩は最終的にはまさにこのような肯定も否定も超脱した根源的宗教的生の戯れであると言える。

一、 なむあみだぶにこころとられて

才市の詩は、彼が説教で聞き覚えたとと思われる僅か

な真宗的仏教用語と、また彼が普段使用していたと考えられる卑近な日常用語から構成される。その語彙数は決して多いとは言えない。ただ、その僅かな語彙を駆使して歌われる宗教詩の世界は多彩な展相を示し、また彼の到り得た宗教的生の深みを見事に示している。その詩は現在確認されるものだけでも数千首あるが、実際には才市は彼が詩を作り初めてその死に至るまでの間にほぼ一万首の詩を残したと推定されている。これらの詩をここでは「なむあみだぶに」ところとられて」という言葉を中心に整理し考察したい。というのは、才市の詩のなかで最頻出するのは「なむあみだぶ」とあり、さらにその「なむあみだぶに」ところとられて」というところに才市固有の境涯が最も良く出ていると考えられるからである。例えば、才市の詩に次のようなものがある。

○み太太のむみわ なむあみだぶに
 こころとられて

(弥陀たのむ身は なむあみだぶに
 こころとられて)

(才市集、ノート一の37、傍点筆者)

この詩ではまさに「弥陀たのむ」という浄土教の生の核心が「なむあみだぶに」ところとられて」というところに性起するということが端的に言い表わされている。浄土教的には「もらう」あるいは「いたたく」ということが一般的に言われ、確かに才市もそういう言葉を頻繁に使用している。しかし、彼の根源的経験はむしろこの「なむあみだぶに」ところとられて」というところにある。言うならば、その他の才市の詩のすべても、この「なむあみだぶに」ところとられて」というところから発し、そこへと収斂する。また彼の詩に頻出し、彼の詩を構成するその他の中心的言葉である「慚愧と歎喜」も「機法一体」も「浮き世」も「虚空」もみな、この「なむあみだぶに」ところとられて」というところから読み解くことができる。

一の一、弥陀の呼び声なむあみだぶつ

さて、「なむあみだぶつ」は言うまでもなく浄土教的信仰の根源語であり、才市の詩の多くもこの「なむあみだぶつ」で締め括られる。例えば、次のように歌われる。

○いきることきかせてもろ太が
なむあみだぶつ

(生きること 聞かせてもろ太が

なむあみだぶつ)

(才市集、ノート二十八の96、傍点筆者)

○なんともないなんともないがわしが
しやわせなむあみだぶつ

(なんともない なんともないが

わしが幸せ なむあみだぶつ)

(才市集、ノート二十八の165、傍点筆者)

才市にとっては文字通りすべてが「なむあみだぶつ」
で事足りている。「生きること」も「なんともない」
も「幸せ」も、すべてこの「なむあみだぶつ」に落着
する。才市はただ繰り返し「なむあみだぶつ」を称え
る。ただ、才市はこの「なむあみだぶつ」の只中でそ
の心の向きを根源的に変えられる。例えば、典型的に
は次のように歌われる。

○となゑてもとなゑても

まとなゑても
み太のよびこゑ
なむあみだぶつ

(称えても 称えても

また称えても

弥陀の呼び声

なむあみだぶつ)

(才市集、ノート九の54)

ここに才市の詩の妙味がある。繰り返し称える心の
果てに「なむあみだぶつ」は「弥陀の呼び声」に転換
する。才市の詩の妙味はこの転換を如何に取り出すか
に係っている。例えば、また次のような詩がある。

○明をごをわしがとなゑるじやない

わしにひびいてなむあみだぶつ

(名号を わしが称えるじやない

わしに響いて なむあみだぶつ)

(才市集、ノート二三の51、傍点筆者)

○・・・

ねんぶつわわしがとなゑるで

わなひねんぶつわむこをからな
り・で・る・の・で・こ・そ・あ・り・わ・太・し・や

ちんぶんかんぶんでな仁がな仁や
らわしやしらの・・・

(・・・)

ねんぶつは わしが称えるではない

ねんぶつは 向こうから

鳴り出るのでこそあり

わたしや ちんぶんかんぶんで

なになにやら わしや知らぬ

・・・(才市集、ノート一五の130、傍点筆者)

「なむあみだぶつ」は単に才市が口で称える念佛ではない。念佛が「わしに響いて」あるいは「向こうから鳴り出る」というところに、才市の念佛との根源的出会いがある。すなわち、「わたしや ちんぶんかんぶんで」という念佛との出会いが、そのまま才市このころの転換を言い当てているのである。

ところでこの事態は、また次のような「称える」ことから「聞く」ことへの転換として取り出される。それは才市の思惑を超えて「ふとでる佛」として、またそこから溢れる出る喜びとして言い表わされる。

○ふとでるぶつを
きいてよろこぶ

またよろこぶ

なむあみだぶつ

(ふとでる佛を

聞いてよろこぶ

またよろこぶ

なむあみだぶつ)

(才市集、ノート一〇の9、傍点筆者)

○二よらい三をききま正や

ねんぶつとなゑる二よらい三

きほをい太いほとけねんぶつ

さいちわこれをきいてよろこぶ

よるのよざめのうむしろいことのおじやいのぶつ

(如来さんを 聞きましようや

念佛称える 如来さん

機法一体 ほとけ ねんぶつ

才市は これを聞いて喜ぶ

夜の夜覚めの

うむしろいことの味やいの佛)

(才市集、ノート九の50、傍点筆者)

○わ太しやわすれてくらすの二

むね二ろくじのこゑがする

きいてよろこぶ

なむあみだぶつ

(わたしや 忘れて暮らすのに

胸に六字の音がする

聞いて喜ぶ

なむあみだぶつ)

(才市集、ノート二十三の5、傍点筆者)

ここには「称える」ことから「聞く」ことへの百八十度の転換がある。ただ、この「聞いて喜ぶ」という表現には、いまだ念佛を聞く才市、あるいはそれを喜ぶ才市が残っている。才市の詩は次節で見るとそのようなあり方をさらに超脱する。

一 の二、こころにあたるなむあみだぶつ

「聞いて喜ぶ」という表現になお残っている念佛と才市との乖離を越えるところは次のような「こころにあたる」と言葉において表現される。

○明ごわ、こころにあたる。

なむあみだぶつ。

(名号は、こころにあたる。

なむあみだぶつ。)

(才市の歌一、第四ノートの三九、傍点筆者)

○わしが、ねんぶつを、となゑるじやない。

ねんぶつのほをから、

わしのこころにあたるねんぶつ、

なむあみだぶつ。

(わしが、念仏を、称えるじやない。

念佛の方から、

わしのこころにあたる念佛

なむあみだぶつ。)

(才市の歌二、第一ノートの54、傍点筆者)

○きいたとをもうじやない、

きいたじやのをて、

こころにあたるなむあみだぶつ。

(聞いたと思うじやない、

聞いたじやのうて、

「こころにあたる なむあみだぶつ。」

(才市の歌二、第一ノートの46、傍点筆者)

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。」

(才市の歌二、第五ノートの96、傍点筆者)

五二

「こころにあたる」ということは、以上のようによまに才市の意志や思惑を超えたところで、念佛との出会いが性起することを言い表わす。ここでは私が念佛を称えるとか聞くという立場が根源的に脱せられていく。この「こころにあたる」ということはまた極めて稀だという意味で、次のように一千万人に一人に当たると言われる富くじに譬えられる。

○ふくのかみ、わしにあたうたふくのかみ、

なむあみだぶのふくのかみ。

(福の神、わしにあたうたふの福の神)

なむあみだぶの福の神)

(才市の歌二、第一ノートの37、傍点筆者)

○あたうた、あたうた、

わたしにあみだがあたうた

なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。

(あたうた、あたうた、

わたしに 阿弥陀があたうた

この譬えを通じて才市は念佛との出会いの驚きと喜びとを端的に言い表わす。そこには称える者と称えられる者、あるいは聞く者と聞かれる者との乖離はない。まさに「あたる」という言葉において、根源的出会いそのものが間髪を容れずそのまま言い表わされるのである。

一の三、こころとられて

前節で見たように、「あたる」という言葉は才市と念佛との出会いの突発性、他者性、稀有性、根源性を見事に言い表わす。そして、それは才市の詩のなかで「こころとられて」という言い回しに改められ深められて、さらなる展相の可能性を広げる。例えば、次のような詩がある。

○わしが聞いたじやありません。

わしが聞いたなありません。

こころにあたるなむあみだぶつ、

いまはあなたに打たれ取られて。

(才市の歌二、第八ノートの2、傍点筆者)

この詩では「聞く」ということが「ころにあたる」に改められ、さらにはそれが「打たれ取られ」へと言い換えられている。この「打たれ取られ」は言うまでもなく次のような「ころとられて」へ通ずる。

○こんなさいちよいなむあみ太ぶを

となゑてまいるじやない
なむあみ太ぶ二ころとられて
まいること

(こんな才市 よい なむあみだぶを

称えてまいるじやない

なむあみだぶにころとられて

まいること)

(才市集、ノート九の18、傍点筆者)

○となゑてまいるじやない

をもうてまいるじやない

をろくじ二ころとられて

まいるごくらくなむあみ太ぶつ

ずいこをじのほをんこをのよろこび

(称えて まいるじやない

思うて まいるじやない

お六字に ころとられて

まいる極楽 なむあみだぶつ

瑞光寺の報恩講の喜び)

(才市集、ノート九の56、傍点筆者)

ここでは「ころとられて」ということにおいて、「称える」も「思う」もみな否定される。しかし、それは単なる否定を意味しない。むしろ、それは「称える」こと、あるいは「思う」ことがまさにそこから脱底的に性起することを意味する。例えば、次の詩のように「称える」ことはまさに弥陀に「とられて」性起する。

○み太のねんぶつもをすることわ

み太二とられてなむあみ太ぶつ

(弥陀の念佛 申することは

弥陀にとられて なむあみだぶつ)

(才市集、ノート十四の204、傍点筆者)

一の四、まるでとられて

さて、「なむあみだぶにこころとられて」ということは才市固有の経験から直観的に掴み取られてきた言葉と言える。しかし、それはもともと真宗的用語からすると「をさめとられて（撰め取られて）」ということ、すなわち「撰取不捨」（阿弥陀佛が撰取して捨てない）ということに由来する言葉と考えられる。例えば、次のような詩がある。

○さいちよいようれしゆわなにか

なむとよばれてなむわをやのこで

をや仁よばれてをさめとられて

すくわれてこのうえわ

をやよねんぶつなむあみだぶつ

（才市よい　うれしうはないか

南無とよばれて　南無は親の子で

親に呼ばれて　撰め取られて

すくわれて　このうえは

親子ねんぶつ　なむあみだぶつ）

（才市集、ノート三の37、傍点筆者）

また、他の詩では才市は端的に「撰取不捨とはとられたことよ」（才市集、ノート十七の17）と歌っている。このように一般的真宗用語が彼独特の仕方を受け取られ、読み込まれていくところに彼の詩の特異性がある。例えば、才市は次のように歌う。

わ太しや。よを二。しもを太。

みうつ・とられ太。う太がい。とられて。

じりきも。とられ。こころも・とられ。

よを二。しもを太。こな。さいちよ。

くやむなよ。なむあみだぶを。

われ二。やるぞよ。わ太しやしやわせ。

なむあみだぶ二。こころとられて。

十一日のあさのごえん

（わたしや、ように、しもうた。

三つ、とられた。疑い、とられて、

自力も、とられ。こころも、とられ。

ように、しもうた。こな、才市よ。

悔やむなよ。なむあみだぶを。

われに、やるぞよ。わたしや幸せ。

なむあみだぶに、こころとられて。

十一日の朝のご縁）

(才市集、ノート七の3、傍点筆者)

ここでは「ここをとられて」ということが、「三つとられた」こととして、すなわち「疑い」も「自力」も「こころ」も「とられ」、奪われたこととして展開されている。ただ、その「三つ」には数としての特別の意味があるのではなく、結局は「なむあみだぶ」に「まるでとられて」、すなわち、すべて奪われてあるということを言い表わすものに他ならない。例えば、才市はまた次のように歌う。

みわここ仁。こころも・ここ仁。

こころこそ。なむあみだぶ仁。

まるで。とられて。

なむあみだぶと。ここ仁。をる。

(身はここに、こころも、ここに

こころこそ、なむあみだぶに

まるで、とられて

なむあみだぶと、ここに、おる)

(才市集、ノート七の10、傍点筆者)

才市は「なむあみだぶに、こころとられて、何にも

ない、ないこそ良けれ、身が楽で」(才市集、ノート十九の33)とも歌う。このような意味での「こころとられて」ということを中核にして、才市の詩は様々な仕方^{うた}で展開する。「ありがたい」も「あさましい」も「機法一体」も「浮き世」もみな、ここから発する。

二 ざんぎとかんぎ

さて、前章で述べたように才市の詩は単なる分別(論理性)を超えた宗教的感情の直接的吐露である。それは様々な仕方で表現されているが、その浄土教的典型的あり方を示すものが「慚愧と歓喜」であり、「あさましやありがたや」である。それは徹底した自己否定であると同時に自己肯定であるような宗教的感情であり、この両者の緊迫関係のなかで才市の詩は歌われる。次のような詩がある。

〇わしのこころわうみのみずかゑられも

せのなみかぜの太つざんぎくわんぎが。

(わしのこころは海の水 変えられもせぬ

波風の立つ 慚愧歓喜が)

(才市集、ノート六の62、傍点筆者)

この詩では「慚愧歎喜」が、海の水に立つ波風の如く、才市のころのなかでとめどなく沸き上がる様子が歌われている。それは才市の意志や思惑を超えて性起する「ころ」の動態をそのままに歌ったものである。この「慚愧歎喜」とは交互透入的緊張関係にあり、本来切り離すことができないものであるが、多くの場合、次節および次々節で述べるように「慚愧」は「あさましや」、また「歎喜」は「ありがたや」と歌われる。

二の二、あさましや

才市は決して人格高潔の士ではない。傍目にも取り立てて目立たず、むしろ凡俗そのままの人物である。彼の詩はほとんどが如来と才市との間で歌われているが、時にその根源的關係に照らし出された才市の日常が顔を出す。例えば、次のように歌われる。

○あさましやあさましや

つるぎつるぎつるぎつるぎと
 くいよをてかかあとわ太しわ
 つるぎのごとくくいよをて

あさましやあさましや

(あさましや あさましや

つるぎ つるぎ つるぎ つるぎと

喰い合うて かかあとわたしは

つるぎのごとく 喰い合うて

あさましや あさましや)

(才市集、ノート四の93、傍点筆者)

下駄職人として日常を過ごす才市にとって、日々の生活の中身を問われる場面は、恐らくその伴侶とのやり取りのなかでほとんどであったであろう。才市はこのような自分のあさましい姿をそのまま詩のなかへ投げ出す。また、次のような詩がある。

○大正四年一月一日

としわかわれどころわ

ひとつあさましや

あさましやあさましや

あさましやあさましや

あさましやあさましや

あさましやあさましや

(年は変われど ころは

一つ あさましや

あさましや あさましや

・・・(才市集、ノート四の一)

年が改まっても少しも変わらない自分のあさましさを、才市は「あさましや」を何度も繰り返すなかに仮託している。ただし、この「あさましや」は才市の単なる道徳的自己反省の所産ではない。彼の詩ではそういう反省的自己は徹底して追い詰められる。例えば、才市は次のように歌う。

○あさましやあさましや

あさましとゆうのもま太をろか

十ぼをせかい仁ころあまるぞ

あさましやあさましや

なむあみ太ぶつなむあみ太ぶつ

あさましやあさましや

(あさましや あさましや

あさましと言うのも まだ愚か

十方世界に ころ余るぞ

あさましや あさましや

なむあみだぶつ なむあみだぶつ

あさましや あさましや)

(才市集、ノート三の76、傍点筆者)

「あさましと言うのも まだ愚か」と才市は歌う。さらに「十方世界に ころ余るぞ」と続ける。そこには、もはや自己反省的自己に納まり切らない自己の姿が映し出されている。また「わしのころわ なんともかとも 言うに言われぬ。世界に余る」(才市の歌二、第九ノートの34)と才市は歌う。ただし、才市の詩では、このように徹底した自己追窮、しかも単なる自己の枠を破った自己追窮の果てに、逆転的に新たな世界が開かれる。例えば、次のような詩がある。

○みじんほどよいことあう

太らば。まよを。仁みじんほ

どよきことないがわしがしや

わせなむあみ太ぶつ

(微塵ほど良いことあつたらば迷うに、

微塵ほど良きことないが わしが幸せ。

なむあみだぶつ)(才市集、ノート六の76、傍点筆者)

「微塵ほど良きことないが わしが幸せ」と、この反転あるいは逆転の切れ味こそ才市の詩の妙味である。それは彼の詩では多くの場合、次節で見るところに「あさましや」が「ありがたや」へと反転するところで歌われる。

二の二、あさましやありがたや

さて、先に述べたように「あさましや」と「ありがたや」は才市の宗教的経験の両極を構成するものであり、彼の詩はそもそもこの両極の緊迫・逆転のなかで歌われる。例えば、次のように連続して歌われる詩がある。

○さいちやあさましいせゑの太か

さわ五尺仁とわのころろひとつわ

十ぼを仁やつま太さかし

さいちやあく仁んあさましや

(才市や あさましい 背の高さは

五尺に届かぬ、ころろ一つは

十方に八又さかし

才市や 悪人 あさましや)

(才市集、ノート一の1、傍点筆者)

○あ・り・が・太・い・な・を・や・の・を・じ・ひ・わ・あ・り

が・太・い・な・ご・こ・を・し・ゆ・い・の・太・ね

も・の・を・さ・い・ち・が・む・ね・仁・う・ゑ・つ・け

て・さ・い・ち・ゆ・こ・の・み・仁・し・て・み・正

(ありがたいな 親のお慈悲は

ありがたいな 五劫思惟の種ものを

才市が胸に植え付けて

才市をこの身にしてみしよう)

(才市集、ノート一の2、傍点筆者)

「あさましい」が「ありがたいな」と、一見矛盾する感情の間を才市の詩は一足飛びに移動する。そして、その両極の感情の徹底性が、さらに「なむあみだぶつ」を誘発する。例えば、次のような典型的な詩がある。

○あ・さ・ま・し・や・い・つ・ま・で・ま・う・て・も

あ・さ・ま・し・や

あ・り・が・太・い・な・い・つ・ま・で・ま・う・て

も・あ・り・が・太・い・な・ご・を・ん・う・れ・し・や

な・む・あ・み・太・ぶ・つ・な・む・あ・み・太・ぶ・つ

(あさましや いつまで待っても

あさましや

ありがたいな いつまで待っても

ありがたいな ご恩うれしや

なむあみだぶつ なむあみだぶつ)

(才市集、ノート二の58、傍点筆者)

ありがたいありが太い・・・

・・・

ありがたいなんぼかいてもみてわせん

みてのはず太よそこがない

なむあみ太ぶわみてのはず太よをや太もの

(あさましや・・・

あさまし あさまし・・・

・・・

あさまし あさまし あさましや

なんぼ書いても あさましや

みてぬ みてぬ筈だよ 底がない

ありがたい・・・

ありがたい なんぼ書いても

みてはせん みてぬ筈だよ

底がない なむあみだぶは

みてぬ筈だよ 親だもの)

(才市集、ノート三十の29、傍点筆者)

○あさましや・・・

あさましあさまし・・・

・・・

あさましあさましあさましやなんぼかいて

もあさましやみてのみてのはず太よ

そこがない

「あさまし」の「底がない」、「ありがたい」の「底

がない」、それはここでは結局「みてぬ筈だよ 親だ

もの」と、「なむあみだぶつ」に帰せられる。すなわ

ち、それは「あさまし」も「ありがたい」も、次節で

見るように単なる反省的自己の底を破る「なむあみだぶつ」から出てくるものだからである。

二の三、親のところが知られたら

「あさまし」も「ありがたい」も単なる自己反省的感情ではない。例えば、まず「あさまし」は才市の単なる自虐的な自己卑下の感情ではない。その点を才市は明らかに自覚して次のように歌う。

○あさましとわがきながめて
なげく太いとくこれわをじ
ひ仁かなやせん太太あさまし
とさんぎするばかりなり
をやのところがしられたら
なむあみだぶわがもの仁なる

(あさましと わが機ながめて

嘆く大毒 これはお慈悲にかなやせん

ただ あさましと慚愧するばかりなり

親のところが知られたら

なむあみだぶは わがものになる)

(才市集、ノート二の53、傍点筆者)

このように「あさまし」は本来「わが機ながめて」嘆く言葉ではない。才市はそういう自己反省的嘆きを「大毒」と言い、ともすると自虐的倒錯感情に逃避するあり方を否定する。またこの「あさまし」に呼応する「ありがたい」も単なる自己満足・喜悦の感情ではない。才市はまた次のように歌う。

○ありがたいのありがたいの
ありがたいのがあな太のじひで
うれしゆないのがわ太しのころ
うれしかるをがかるまいが
きはをい太いなむあみだぶつ
これがしれたらありがたい

(ありがたいの ありがたいの

ありがたいのが あなたの慈悲で

うれしゆないのが わたしのころ

うれしかろうがかるまいが

機法一体 なむあみだぶつ

これが知れたら ありがたい)

(才市集、ノート二の42、傍点筆者)

「ありがたい」や「うれしい」はいずれも単なるわたくしの感情ではない。むしろ、それはこちらが「うれしからうがかるまいが」、現前到来するものと言ふべきものである。それは結局、先の詩の「あさましい」と同じで「親のこころ」に、あるいはここでの「あなたの慈悲」に還るところに湧き出る宗教的根源感情である。そして、そのような宗教的根源感情はそもそも「なむあみだぶつ」の一人働きに帰せられる。

○よろこびざんぎわひとつもの

なむあみだぶつ なむあみだぶつ

(よろこび ざんぎはひとつもの)

なむあみだぶつ なむあみだぶつ

(才市集、ノート一四の22、傍点筆者)

○あさましやあさましいねんぶつ

ごをんねんぶつさいちわねんぶつ

がふ太あつあるかふ太あつ

あるでわなけれども

りよやくつとめるひとつねんぶつ

(あさましや あさましい念佛)

ご恩念佛 才市は 念佛が

二つあるか、二つあるではなければ
両役つとめる ひとつ念佛)

(才市集、ノート二の8、傍点筆者)

「あさましい念佛」も「ご恩念佛」も、すなわち「あさましや」も「ありがたや」もここでは「ひとつ念佛」に帰せられる。「愚痴と喜び ひとつもの なむあみだぶつから 出るものよ」(才市集、ノート五の6)と才市は歌う。そして、それは詰まる所「あさましや」も「ありがたや」も「なむあみだぶつにこころとられて」ということに発することを意味する。例えば、以下のような詩がある。

○あさましざんきのなむあみだぶつ

なむあみだぶつこころとられて

(あさまし 慚愧のなむあみだぶつ

なむあみだぶつに こころとられて)

(才市集、ノート三十一の53、傍点筆者)

○をやさま仁わしのこころいま

わとられてごをんうれしや

なむあみだぶつなむあみだぶつ

(親様に わしのこころ いまはとられて

ご恩うれしや なむあみだぶつ . . .)

(才市集、ノート二の59、傍点筆者)

○とうてみなされご正のだいじ

なむあみだぶにこころとられ

てごをんうれしやなむあみだぶつ

(問うてみなされ 後生の大事

なむあみだぶにこころとられて

ご恩うれしや なむみだぶつ)

(才市集、ノート二の55、傍点筆者)

「あさまし」と「うれしや」とがともに単なる自己感情ではなく、「なみあみだぶにこころとられて」というところから出てくるということ、そのことが新たな宗教的生の世界を切り開く。それは単なる「慚愧と歎喜」あるいは「あさましやありがたや」に終わらない世界である。次節で見えるように、才市の詩の真骨頂はまさにそこに現われる。

二の四、うむしろい

前節で見たように、才市の詩は一方では真摯な信仰告白であり、「慚愧と歎喜」という根本的宗教感情の緊迫関係のなかでその詩は歌われる。しかし他方では、その緊迫関係が単なる自己反省的自己に支えられた関係ではないところに、それが脱底的に超えられる世界が開かれる。ここでは例えば「慚愧歎喜」は次のような「あずび道具」として歌われる。

○わ太しやあな太のあずびどを

ぐをもろ太ざんぎくわんぎの

あずびどをくをもろ太

ごをんうれしやなむあみだぶつ

(わたしや あなたのあずび道具をもろた

慚愧歎喜のあずび道具をもろた

ご恩うれしや なむあみだぶつ)

(才市集、ノート二十の53、傍点筆者)

才市が「あさましや」あるいは「ありがたい」と歌うとき、上述したようにそれは掛け値なしに「あさましや」であり、「ありがたい」である。「いつまで待つ

でも「あさましや」であり、「いつまで待っても ありがたいな」である。ただ、「あさまし」の「底がない」、あるいはまた「ありがたい」の「底がない」と言われ、その「底がない」がまさに脱底的に「みてぬ筈だよ親だもの」と「なむあみだぶつ」へ還されていくところ（前々節参照）新たな世界が開かれる。ここでは「なむあみだぶつ」はこの詩のように「あすび道具」あるいはまた次の詩のように「楽しみ道具」となる。

○わ太しやしやわせはちをくしせんのみち
なかいなむあみ太ぶかをちてをう太よ
ひろをてみればもらいものこれわさい
ちがたのしみどをぐをやのしんせつ
まことのじひよ

（わたしや しあわせ 八億四千の道なかに
なむあみだぶが落ちておったよ
拾うてみれば もらいもの
これは才市が楽しみ道具 親の親切
まことの慈悲よ）

（才市集、ノート一の4、傍点筆者）

このようにして「なむあみだぶつ」の一人働きのなかで、真摯な信仰告白が真摯であるまま超脱される。深刻な信仰告白である筈の歌が一転して「うむしろい」や「楽しむ」となる。

○め仁みゑのほとけとはなし
なむあみ太ぶつをやこのはなし
うむしろいなむあみ太ぶつ
なむあみ太ぶつ

（目に見えぬ 佛と話

なむあみだぶつ 親子の話
うむしろい なむあみだぶつ
なむあみだぶつ）

（才市集、ノート三の49、傍点筆者）

○さいちや太のしむ
なむあみ太ぶつ
正ぶつも
み太もさいちもこれを
太のしむ
なむあみ太ぶつ

（才市や 楽しむ

なむあみだぶつ

諸佛も

弥陀も才市も

これを樂しむ

なむあみだぶつ

(才市集、ノート三の40、傍点筆者)

以上のように「なむあみだぶつ」を介して「あさましやありがたや」が「うむしろい」あるいは「樂しむ」へと一転する。それは結局「わしのところ」と「親様のところ」とが、この「なむあみだぶつ」において「ひとつ」となるからである。才市はさらに次のように歌う。

○をやさまのころ太のしむ

なむあみ太ぶをわしのころ

とひとつ仁なりて

ごをんうれしやなむあみ太ぶつ

(親様のころ 樂しむ)

なむあみだぶを

わしのころとひとつになりて

ご恩うれしや なむあみだぶつ

(才市集、ノート一の49、傍点筆者)

三、世界虚空もみなひとつ

さて、才市の詩において開かれる世界とは以上のような「うむしろい」あるいは「樂しむ」という言葉において表現される世界であるが、それはまさに今述べたように才市と弥陀とが「ころひとつ」になるところに開かれる世界である。その「ひとつ」になるところを才市は次のように歌う。

○わしのころとあなた太のころ

ころひとつのなむあみ太ぶつ

(わしのころとあなたのころ)

ころひとつのなむあみだぶつ

(才市集、ノート一の11、傍点筆者)

○あなた太のころがわたしのころ

わしのころがあなた太のころ

ごをんうれしやなむあみ太ぶつ

(あなた太のころがわたしのころ)

わしのころがあなた太のころ

ご恩うれしや なむあみだぶつ

(才市集、ノート十五の100、傍点筆者)

この「ごころひとつ」あるいは「あなたごころがわたしのごころ わしのごころがあなたのごころ」と言われるところにおいて初めて才市の言う「うむしろい」あるいは「樂しむ」という「味わい」が出てくる。ただ、その「ひとつ」になることは前章で述べたようにまさに「ごころとられて」性起する。次のように歌われている。

○あさましやあさましや

をや仁ごころをとられてからわ

ぶつとさいちわひとつもの

(あさましや あさましや

親にごころをとられてからは

佛と才市はひとつもの)

(才市集、ノート二の9、傍点筆者)

三の一、機法一体

さて、才市はまたこの佛と「ひとつ」となるごころ

を典型的には「機法一体なむあみだぶつ」と歌う。この「機法一体」は才市が説教を通じて聞き覚えた真宗の仏教用語の一つであるが、それは才市を通ることによって変貌し、躍動するものとなる。

○ありがたいあな太ごころと

わ太しのごころひとつ仁なりて

きほをい太いなむあみ太ぶつ

わ太しやむ上を まつばかり

(ありがたい あなたごころと

わたしのごころ ひとつになりて

機法一体 なむあみだぶつ

わたしや 無常を待つばかり)

(才市、ノート一の66、傍点筆者)

この「機法一体なむあみだぶつ」ということは、やはり上述したように「ごころとられて」性起する。次のような詩がある。

○ごをんうれしやごころとられて

きほをい太い

なむあみ太ぶつなむあみ太ぶつ

やれやれうれしやうれしや

なむあみ太ぶつ

なむあみ太ぶつ

(ご思うれしや ころとられて

機法一体

なむあみだぶつ なむあみだぶつ

やれやれうれしや うれしや

なむあみだぶつ

なむあみだぶつ)

(才市集、ノート三の67、傍点筆者)

また、才市はこの「ころとられて」ということを

決定的に次のような詩において言い表わす。

○ゆうこと太ぶつが

きはをい太い

ごをんうれしやなむあみ太ぶつ

(言うこと絶えたが

機法一体

ご思うれしや なむあみだぶつ)

(才市集、ノート十六の190、傍点筆者)

このように「機法一体」とはまさに「言うこと絶えた」ところであるが、才市の場合、その「言うこと絶えた」ところから一万首におよぶ詩が歌われる。それはこの「言うこと絶えた」ところこそ、すべてが変貌するところであるからである。才市にとつて浮き世が稼業が、さらに世界そのものが変貌する。

三の二 まよいの浮き世がうむしろい

才市は若い頃は浜田の都野津や九州福岡の直方方面へ船大工として出稼ぎに出ていることもあるが、晩年は故郷の小浜で下駄職を稼業として暮らしていた。そして、彼が詩を書き付け始めたのは、その小浜での稼業の合間であつたと言われている¹¹⁾。したがつて彼が「迷いの浮き世」と歌うのはこの下駄屋稼業を中心としたものであり、それはある意味では極めて狭い世界であつたとも言える。ただし以下に述べるように、才市はその狭い「浮き世」を満喫する境涯へと到るのである。

さて、才市は自分のことを「うきよのぼせのばかのはなたれ(才市集、ノート五の39)」と言う。ただ、その才市がのぼせる「浮き世」は彼に歌わせるとあさましい

迷いの世界であり、また単なる「水の泡」である。次のように歌われる。

○あさましやわしのこころを太
とゑるものわうきよ仁わない

あさましやをんうけ太をやさ

ま仁めんほくないことをもいます

をそろしやこれがむけんのごを仁

なるなむあみ太ぶつ

なむあみ太ぶつ

(あさましや わしのこころを

譬えるものは 浮き世にはない

あさましや 恩を受けた親様に

面目ないこと思います。

恐ろしや これが無間の業になる

なむあみだぶつ なむあみだぶつ)

(才市集、ノート十五の32、傍点筆者)

○さいち、あさまし、

かかもまよい、さいちもまよい、

まよいものがつれよをて、

ふふになりて、また、まよう。

あさましや、あさましや。

(才市、あさまし

かかも迷い、才市も迷い

迷い者が連れようて、

夫婦になりて、また、迷う

あさましや、あさましや。)

(才市の歌一、第二ノートの六九、傍点筆者)

○な仁こともほんぶの太のしみ

みずのあわけゑてふくれて

またけゑてしまひ仁やひび

なくばかりつまらんつまらん

のちわじごく仁をちるかな

(なにごとも 凡夫の楽しみ

水の泡 消えてふくれて

また消えて しまいにやひび

泣くばかり つまらんつまらん

後は地獄に落ちるかな)

(才市集、ノート七の4、傍点筆者)

こころも「あさまし」、夫婦生活も「あさまし」、そして「なにごとも 凡夫の楽しみ水の泡」である。た

だし、才市にとつてこの「あさまし」、「つまらん」
「後は地獄に落ちる」と言われる事態が「ことごとく」
また「ありがたや」に転ずる。次のように歌われる。

○をそろしやうきよのしやばや

わむけんのごをことごとく

みなむけんありがたや

これがてんじて上をどの

むけん

(恐ろしや 浮き世の娑婆は

無間の業 ことごとく

みな無間 ありがたや

これが転じて 浄土の

無間) (才市集、ノート三の27)

「ことごとく」「無間の業」となるものが、そのまま
「転じて 浄土の無間」となる。この逆転を引き起こ
すものは、また「なみあみだぶにこころとられて」で
ある。才市は次のように歌う。

○あさましやあさましや

うきよ仁そまるわたくしを

み太のじひにみ太されて
なむあみ太ぶ仁こころとられて

(あさましや あさましや

浮き世に染まるわたくしを

弥陀の慈悲に満たされて

なむあみだぶにこころとられて)

(才市集、ノート二十の2、傍点筆者)

○わたくしやうきよ仁をるこ太をるが

こころひとつわをや仁とられて

(わたくしや 浮き世に おるこたおるが

こころひとつは 親にとられて)

(才市集、ノート一の99、傍点筆者)

○さいちや、しやわせ、

こころひとつを、

かゑてもろをて、

うろのゑしんわ、かわらねど、

こころひとつわ、

をやにとられて。

(才市や、しあわせ、

こころひとつを、

換えてもろうて、

有漏の穢身は、変わらねど、

こころひとつは、

親にとられて。

(才市の歌一、第二ノートの二四、傍点筆者)

ある意味では浮き世暮らしのあさましい才市の姿は
何も変わらない。ただ、この「こころとられて」とい
うところに決定的違いがある。というのは、この「こ
ころとられて」ということは上述したように単なるネ
ガティブな出来事ではないからである。それはむしろ
「迷いの浮き世」に一步踏み出すことを可能とする。
例えば、次のように歌われる。

○さいちやうきよをどをしてすごす
さいちやうきよをまよいですごす
こころひとつわあな太仁とられ

(才市や 浮き世をどうして過ぐす

才市や 浮き世を迷いで過ぐす

こころひとつは あなたにとられ)

(才市集 ノート五の39、傍点筆者)

ここでは「迷いの浮き世」が捨てられてはいない。
むしろ逆に「浮き世を迷いで過ぐす」と言い切られて
いる。そこには、才市が浮き世に積極的に踏み出す姿
が歌われている。そして、そういうポジティブな姿勢
に変わる「こころ」の機微を才市はまた次のように歌
う。

○わしのさんぜがみなきまて
京をみ仁かわるわしのこころが
なむあみだぶ仁ひきとられ
ごをんうれしやなむあみだぶつ

(わしの三世がみな消えて

軽微に変わる わしのこころが

なむあみだぶにひきとられ

ご恩うれしや なむあみだぶつ)

(才市集 ノート一の89、傍点筆者)

「軽微にかわる わしのこころが」とは、まさに才
市が「うむしろい」あるいは「楽しみ」と言われる境
涯に一步踏み込むことを意味する。そしてまた、才市
はこのように「軽微に」変わったところから次のよう
に歌う。

○さいちやな仁がうむしろい
まよいのうきよがうむしろい

ほをよろこぶ太ねとなる

なむあみ太ぶのはなざかり

(才市や なにがうむしろい

迷いの浮き世がうむしろい

法を喜ぶ種となる

なむあみだぶの 花盛り)

(才市集、ノート二の36、傍点筆者)

ここが太のしみ

(生き延びることの詰まった

ここが楽しみ)(才市集、ノート三の26)

○うきよふぬけ仁なるがよい

いんまこころをい太太くよ

(浮き世 腑抜けになるがよい

今 こころをいただくよ)

(才市集、ノート十五の10)

「迷いの浮き世がうむしろい」、ここにまさに「浮き世」を「憂き世」のまま楽しむ才市の境涯がある。才市はまた「憂きことの 重なる身こそ うれしけり」(才市集、ノート十五の26)と歌う。ただし、ここでもまた才市が「迷いの浮き世がうむしろい」と言うのは単なる自己反省的居直りではない。上述したように、それは現前到来するものに「こころとられて」あるいは「言うこと絶えて」、逆転的に開かれた境涯である。次のような詩がある。

○いきのびることのつまう太

ある意味では才市にとってこの世の楽しみはことごとく水泡に帰し、すべてが行き詰まる。しかし、その行き詰まるのが、そのまま楽しみとなる。それはその行き詰まりそのものが「なむあみだぶにこころとられて」性起するものだからである。すなわち、そこに全く新たな境涯が開かれるからである。それゆえ、逆説的に「浮き世 腑抜けになるがよい」と歌われるのである。以下に見るように、ここから才市にとって行住座臥も稼業も世界も、すべてが変貌する。

三の三、臨終済んで葬式済んで

○わ太しやりん十すんで
そをしきすんで

上をど二ころすませてもろて
なむあみ太ぶとうきよ二をるよ

(わたしや 臨終済んで

葬式済んで

浄土にころすませてもろて

なむあみだぶと浮き世におるよ)

(才市集、ノート八の32)

臨終も葬式も済んだ者とは、人生の最大の課題を果たし、既に浄土にころ棲む者となつた者のことである。浄土は才市にとつて決して遠いところにあるものではない。「なむあみだぶにころとられて」変貌する世界、すなわち、そこに開かれる境涯が才市にとつてそのまま浄土である。

○めがかわるよがかわるこころがくらく二
かわるうれしやなむあみ太ぶつ

(目が変わる 世が変わる

こころが極楽に変わる

うれしや なむあみだぶつ)

(才市集、ノート十四の70)

まさにこの世を見る「目が変わる」ところに開かれる世界が浄土である。ここからまた次のように歌われる。

○しやばで太のしむごく

らくせかいこころが上をと二

なるぞうれしや

なむあみ太ぶつ

(娑婆で楽しむ極楽世界

こころが浄土になるぞ

うれしや なむあみだぶつ)

(才市集、ノート十四の112)

○しやばのうきよわあさまし

うきよこころが上をと二なるぞ

うれしやなむあみ太ぶつ

(娑婆の浮き世はあさまし

浮き世こころが浄土になるぞ

うれしや なむあみだぶつ

(才市集、ノート十四の40)

○しやばでごくらくこれが

太のしみしやばとごくらく

うきよがさかゑ

(娑婆で極楽 これが

楽しみ 娑婆と極楽

浮き世が境)

(才市集、ノート十の80、傍点筆者)

「娑婆で極楽」とは「こころとられて」変貌した世界のことである。この変貌した世界ではまず次の詩のように「邪見と愚痴と」で日送りする才市が「慚愧と歡喜」で日送りする身となる。

○さいちやなんでひをくり

するかわ太しやじやけん

ぐちとひをくりをや二

もろを太ざんぎとくわんぎ

これでひをくりさせてもらうよ

(才市や なんで日送りするか

わたしや 邪見と愚痴と日送り

親にもろうた慚愧と歡喜

これで日送りさせてもらうよ)

(才市集、ノート十の53、傍点筆者)

ただ、この「慚愧と歡喜」とが、上述したように飽くまで「親にもろうた」ものであり、単なる自己反省の所産ではないところに、次の詩のように「百味飲食」と言われる多彩の「あじわい」のある世界が開かれるのである。

○うきよからざんぎくわんぎの

ひやくみをんぜき

ひやくみをんぜきなむあみ太ぶつ

わ太しやあな太仁やしなわれ

なむあみ太ぶつなむあみ太ぶつ

(浮き世から慚愧歡喜の

百味飲食

百味飲食なむあみだぶつ

わたしや あなたに養われ

なむあみだぶつ なむあみだぶつ)

(才市集、ノート十一の65、傍点筆者)

三の四、浮き世はたらきうむしろい

さて、このような多彩の味わいの世界に変貌した世界においては行住座臥そのものも変貌する。すなわち、行住座臥が「うむしろい」ものとなる。才市は次のように歌う。

○み太の。ごをんわ・うむしろい
ぎよ十ざぐわ仁これを太の
しむ

(弥陀のご恩は うむしろい
行住座臥に これを楽しむ)

(才市集、ノート十六の116)

○・・・

かごんでも、なむあみだぶつ。
のうても、なむあみだぶつ。

(屈んでも、なむあみだぶつ
伸びても、なむあみだぶつ)

(才市の歌一、第三ノートの六九)

行住座臥が、また屈んでも伸びても「うむしろい」

というところから、さらに才市にとっては稼業が、働くことが変貌する。すなわち、働くことが「うむしろい」と歌われる。

○よるねるもひるのかぎをもひとつ
ことなむあみ太ぶとね太りおき太り

(夜寝るも 昼の稼業も ひとつこと

なむあみだぶと 寝たり起きたり)

(才市集、ノート十四の20)

○うきよはたらき、うむしろい、

このまま、をんれいほをしやわ、

ごをんうれしや、なむあみだぶつ。

(浮き世はたらき、うむしろい、

このまま、御礼報謝は

ご恩うれしや、なむあみだぶつ)

(才市の歌二、第三ノートの45、傍点筆者)

ここで「浮き世はたらき、うむしろい」と歌われるのは、何らかの理由があつて、例えば素晴らしい仕事ができるとか、お金が儲かるとかいう理由で、「うむしろい」と言われるのではない。確かに、そういう理

由で「うむしろい」こともあろうが、ここではさういふ理由以前、あるいはそれ以上のところで「うむしろい」と歌われている。すなわち、その「以前」とは、働くことの基底にある行住坐臥が、すなわち屈んだり伸びたりすることが既に「うむしろい」のである。またそれ故にこそ、その「以上」とは、たとえ「浮き世働き」が巧いこがいくまいが、「うむしろい」のである。したがって、ただ働くことが、さらには下駄屋稼業が「うむしろい」ものとなるのである。

おわりに、世界・虚空・空気もみなもうれし

浮き世が稼業が変貌する。そして、さらには世界そのものが変貌する。そこでは、辛いとか悲しいとか、働くとか、一切の言動を離れて、端的に喜ばれる世界が開かれる。才市は次のように歌う。

○・・・

あうれしせかいもうれしなむあみ太ぶつ

あうれしこくもうれしなむあみ太ぶつ

あうれしくうきもうれしなむあみ太ぶつ

あうれしわしもくうき二すいとられなむあみ太ぶつ
二すいとられなむあみ太ぶつなむあみ太ぶつ
・・・

(・・・)

あうれし、世界もうれし、なむあみだぶつ

あうれし、虚空もうれし、なむあみだぶつ

あうれし、空気もうれし、なむあみだぶつ

あうれし、わしも空気に吸い取られ、

なむあみだぶつに吸い取られ、

なむあみだぶつ　なむあみだぶつ・・・

(才市集、ノート二十五の1)

ここにはもはや一切の理屈はない。ただ、「あうれし」と歌われる。そして、世界や虚空や空気は、才市の喜びが躍動するところそのものとなる。才市はここでは世界・虚空とひとつである。「わしも、世界も、虚空もひとつ(才市の歌二、第三ノートの二〇)」と言われ、また次のように歌われている。

○なむあみ太せかいわしもこくも

しゃべつなしこれがひとつの

なむあみだぶつ

(なむあみだ 世界もわしも虚空も

差別なし これがひとつの

なむあみだぶつ)

(才市集、ノート二十九の75)

○せかい こくうも わたくしも

これがひとつのなむあみだぶつ

(世界 虚空も わたくしも

これがひとつのなむあみだぶつ)

(才市の歌三、第七ノートの129)

才市がこの世界・虚空と「ひとつ」となるところ、それはまたここでも以下の詩のように「とられて」と表現される。

○なむあみだぶは、こくうのごとく、

そのなかい、さいちとられて。

さいちも、なむあみだぶつ。

(なむあみだぶは、虚空の如く、

そのなかへ、才市とられて。

才市も、なむあみだぶつ)

(才市の歌一、第一ノートの二三)

○なむあみだぶわ、てんなり、ちなり、こくうなり。

これにさいちが、ぬくめとられて。

(なむあみだぶは、天なり、地なり、虚空なり、

これに才市が、ぬくめとられて)

(才市の歌二、第二ノートの一〇八)

才市が天に、地に、虚空にとられるところに次のように「ええな」、「ああ」、「うれし」という言葉が溢れ出る。

○ええな、

せかい、こくうがみなほとけ。

わしもそのなか、なむあみだぶつ。

(ええな、

世界、虚空がみな佛

わしもそのなか、なむあみだぶつ。)

(才市の歌一、第六ノートの三〇)

○ああ、せかいにみちるなむあみだぶつ。

・・・(ああ、世界に満ちるなむあみだぶつ)

(才市の歌一、第六ノートの三二)

○せかいがうれし、

せかいがみな、なむあみだぶつ。

(世界がうれし、

世界がみな、なむあみだぶつ)

(才市の歌一、第六ノートの六四)

○うれし、こくうがうれし、なむあみだぶつ。

(うれし、虚空がうれし、なむあみだぶつ)

(才市の歌二、第六ノートの七〇)

またさらに才市は、先の詩にもあつたようにその喜び溢れる虚空・世界を、「空気」と言い表わす。「空気」とはわれわれが日々吸い込む当のものであり、われわれの意志や思惑に関わらず、われわれの命の糧となるものである。次のような詩がある。

○よろこびわ、てんなり、ちなり、こくうなり、

くうきなり、

わしもくうきで、あなたもくうき、

くうきのなむあみだぶつ。

(喜びは、天なり、地なり、虚空なり、

空気なり、

わしも空気で、あなたも空気、

空気の名むあみだぶつ)

(才市の歌二、第六ノートの八五)

○わしのよろこびや、こくうのくうき、

これがろくじの、なむあみだぶつ。

(わしの喜びや、虚空の空気、

これが六字の、なむあみだぶつ。)

(才市の歌二、第三ノートの一六)

この「空気」と歌われる世界に、才市の到り着いた境涯がある。というのは、言うならば、ここでは一切の言動を捨てて、日々「空気」を吸うこと自体が喜びとなり、すべてとなるからである。このような境涯からまた次のように歌われる。

○せかいはぼ太んであります、

わ太しやぼ太んのなかにとられ

(世界は 牡丹であります)

わたしや 牡丹のなかにとられ)

この詩には、もはや「あさましい」も「ありがたい」も、「うむしろい」も「楽しむ」も、「うれしい」も、さらには「なむあみだぶつ」すらもない。才市は「牡丹のなかにとられ」、ただ「世界は牡丹」である。また牡丹が世界である。そこでは、すべてが超脱され、牡丹において世界が才市に現前し、あるいは才市が世界に現前する。牡丹はそういう世界と才市との根源的出会いの場である。

以上、「なむあみだぶにこころとられて」ということから始めて、「慚愧と歎喜」とがその根源的緊迫関係を通して「うむしろい」と言われる境涯へと到り、さらにはその境涯が、「世界、虚空」、あるいは「空気」と呼ばれる開けへと超脱するところを、才市の詩から取り出した。この開けのなかで、我々は我々本来の生の在り処を見出すと同時に、世界は世界本来の輝きを取り戻す。才市の詩はこのような豊饒な世界を我々に提示していると言える。

- (1) 浅原才市（一八五〇〜一九三二）、石見国邇摩郡大浜村小浜（現在の島根県邇摩郡温泉津町字小浜）出身の浄土真宗の一篤信者。詳しくは、佐藤平著「浅原才市年譜」（『大谷女子大学紀要』第二十号）参照。

- (2) 温泉津近辺でそのように称された一種の宗教詩。前註の「浅原才市年譜」の補注(2)参照。

- (3) 浅原才市の詩を集めた主な本には現在、「妙好人浅原才市集」（鈴木大拙編著、春秋社）と「定本妙好人才市の歌全」（楠恭篤、法蔵館）とがある。今回も主に引用はこの二著に拠った。以下、前著を「才市集」、後著を「才市の歌」と記し、それに続けてノート番号、詩の番号の順に記した。

- (4) 「妙好人」とはここでは特に浄土真宗の篤信者のことを呼ぶ。その詳しい歴史像については柏原祐泉著「妙好人——その歴史像——」（『浄土仏教の思想十三』講談社所収）参照。

- (5) 金子大栄編「真宗聖典」（法蔵館）111頁には次のように訳されてある。「いけのなかの蓮華、おほきさ車輪のごとし。あをきいろにはあをきひかり、き

なるいろにはきなるひかり、あかきいろにはあかき
ひかり、しろきいろにはしろきひかりあり。微妙香
潔なり。」

- (6) 岩見護著「赤尾の道宗」(永田文昌堂) 参照。
- (7) 柳宗悦・衣笠一省編「妙好人因幡の源左」(百華苑) 参照。
- (8) 清水順保著「庄松ありのまま記」(永田文昌堂)
および甲斐静也著「庄松同行物語」(百華苑) 参照。
- (9) 寺本慧達著「浅原才市翁を語る」(千代田女学園)
参照。
- (10) 佐藤平著「妙好人浅原才市の入信に関する一考察」
〔「親鸞教学」第三十九号〕56頁から57頁参照。
- (11) 前掲「浅原才市年譜」参照。

その他参考文献

- 水上勉、佐藤平編「大乘仏典 中国・日本編 28
妙好人」 中央公論社
- 鈴木大拙著 「日本の靈性」 岩波文庫
- 松塚豊茂著 「浄土教思想の哲学的考察」
永田文昌堂
- 寿岳文章編 「柳宗悦 妙好人論集」 岩波文庫